

「身じまい」のおと



滝野隆浩
社会部編集委員

◎若林健次

新コラムの最初のテーマに選んだ「改葬について学ぶのに、聖徳大学の長江昭子教授(61)に会いに行った。そしてすぐ、私は「弟子入り」することにした。墓石屋の三代目社長でもあって実務もよくご存知。墓を訪れる人の声を聞いて育ち、その経験に基づき考察しているのがいいのだ。

博士論文のタイトルは「人間の死後生活空間としての墓地の永続管理に関する研究」。ムズかしそうだけど、要は「お墓って何?」とどう、社長なりの學術的問いかけなのだ。勝手に解釈する。あるいは、墓というものを通して、戦後社会の変容をみつめ直すということがある。

先生の論文は、すごく美証的である。たとえば△墓参率Vの調査。墓参りの頻度は「わへら」いかを考えると、私はアンケート方式へらしいか思ひ浮かはない。ところが、先生は、春・秋のお彼岸と新・旧盆に、総面積105畝、7万5000墓の都立八柱霊園(千葉県松戸市)で、拱花の有無の現地調査を実施した。実際見てみて花が供えてあったら、「墓参りに来た」とカウントする。予備の調査で社員と2人で約1万2000墓を見て回り、そのあと対象を絞り込んだ。それぞれの墓参りのピークが過ぎたあと、1〜2

「墓地は日々動いている」

日かけて調べ上げた。かなりの実態に近いデータである。

10年前の04年に実施された調査。詳細は報告できないが、春秋のお彼岸の△墓参率Vはともに71%、お盆では62%だった。都心から20分離れた立地を考えると、高いほうといえる。おもしろいのは、副次的に得られたデータ。雑草がぼうぼう生い茂っている「放置墓」が春から秋にかけて7カ所から11カ所に増え、更地にされた「空き墓地」は10カ所から6カ所に減って再貸し付けされていた。

「墓地は日々動いている」と論文は結論つけた。なかなか味わい深い。墓とは、しんと静かです。でもそこにあるという印象があるが、先生は「動いている」というのである。このあたりに、改葬問題の本質があるのかもしれない。論文ではそのほか、夏目漱石の「彼岸過迄」における葬儀・墓地観に触れたり、諸外国の墓事情が出てきたりで、読みごたえがある。

さて、墓には、どんな機能があるのか。長江先生は三つあるとどう。①家族や先祖の供養「は「〇〇家」という昔ながらのイメージ。長い血のつながりの中に自分がいることを再確認をする場所であること。」②骨の置き場「骨を埋葬するのは決められた墓地に」と法律による。逆にいえば、地面の下に埋めなければ骨つぼは手元に置いていてもいい。③故人の記録・記念「なるほど、その人なりのメッセージだね。三つの機能あって、それぞれが社会の激変の中で変わってきている。」

墓は動く。そして先生は「お墓の引越しいというのは、人生最後の宿題なんです」と言う。宿題か! 苦手だ。